

# 趣味を極めて 自由に生きる!

ただし、  
神々は愛し子に  
異世界改革を  
お望みです



紫南 Shinan

Illustration 星らすく



## エルダン

キートル伯爵家の家令。  
傍若無人な主人たちに  
嫌気がさしている。

## ジュエル



アカネ  
茜

キヨ  
綺羅



## ファリマス

フィルズの祖母。  
踊り子。



## ユセリア

カルヴィア国第一王子。  
実は国王の子ではない。



## フラメラ

カルヴィア国の第三王妃。  
世間の悪評をはねのけて、  
元気に商会で働いている。

## リュブラン

フラメラ妃の息子で、カル  
ヴィア国第三王子。フィ  
ルズの右腕でもある。



## フィルズ

公爵家第二夫人の子で、  
モノ作りが大好きな少年。  
優しいながらもやや毒舌。  
セイスフィア商会を運営中。

## エルセリア

フィルズの異母妹。性格矯  
正を受けた結果、なぜかフィ  
ルズで“推し活”を始めた。

主な登場人物 Main Characters

## ミッシェン① 新しくなった獄舎を視察しよう

大陸の中心部に位置するカルヴィア国。その王都には、国内随一と言われるようになったセイスイア商会が支店を持つている。

商会をまとめるのは、神々からこの世界を改革してくれと頼まれた神の愛し子であるフィルズ・エントラールだ。今世ではこの国唯一の公爵家の次男として生まれたが、現在は第二夫人で流民である母クラルスと共に家を離れている。

そのお陰で、貴族子息の義務なんてものは無視して、趣味全開で神も望む異世界改革は順調に進んでいた。最近はこれに王子や王女、貴族の子息子女達も巻き込んでおり、意図せずして貴族社会の風通しも良くなっている。

大きな変化があったのは、どの国も手を出せずにいた、大陸中で暗躍している大きな闇ギルド、『ブラックロード』のこの国の支部が壊滅したこと。そこから貴族達の不正や罪が暴かれたのは半年と少し前のこと。それと同時に行われた城前広場での公開審判は、まだまだ人々の記憶に鮮烈に刻まれている。

その時の衝撃や興奮が忘れられない住民達からのリクエストで、セイスフィア商会は最近、新たに土地を広げて部署を新設しようとしていた。

その話をしたのは、ファイルズが談話室に休憩しに来た母クラルスとお茶をしていた時だった。

「そろそろ、娯楽をもっと充実させたいよな。ってことで、母さん。劇場を作ろうと思う」

「ゲキジョウ？」

かつてこの世界には賢者と呼ばれた異世界からの転生者達があり、彼らの力で地球にあるような様々な娯楽が存在していた。

しかし、権力者達がそれらの利権を奪い、いつしか消えたものは数知れない。その中の一つが劇場。演劇施設は金儲けのためだけにあくどく利用され、見目の良かった演者達は貴族達の装飾と成り果てた。脚本家達は都合の悪いことを書かれては統治が揺らぐからと監視され、自由をなくしてしまい、これにより演劇や劇場が消えたいらしい。

だが、セイスフィア商会主催の公開審判での再現劇や、修道院内を詳らかにしたドキュメント映像を見たことで、見物に来ていた民達はこの面白さを知ってしまった。

「再現劇やっただろ？ それをさあ、物語でやるんだよ。吟遊詩人は、一人で演じるじゃん？ それを複数人で、登場人物一人に対して一人がそのものに成り切って演じるんだ」

「なにそれ……」

クラルスは目を丸くする。元流民として、各地を放浪していた彼女だからこそ、その魅力が分かる。流民は一人で行動する。語り部として、吟遊詩人として、踊り子としてそれぞれ一人で語り、

演じ、魅せる。流民も見人もそれに満足していた。

しかし、今は物足りなく感じるのだ。演劇というものを前世の記憶で知っているファイルズは当然だが、一度映像で見ってしまった者達にとってもそれは同じだ。

「流民が集まってやるのもいいな。って。ほら、合奏とかしてみたくね？」

「っ、合奏……楽器を二人で？ あ、十人くらい集まってってこと!? やりたい!」

「踊りもさあ、何人かで踊るとか」

「二人でダンスじゃなくて、舞を何人かで揃ってとか!? やってみたい!! そうよね! だって、ダンス講座なんて、みんなで一緒にやるじゃない? あれ、見ていて楽しいの! それをやればいいんだわ!」

大抵、複数人で踊るといっても、舞踏会のようなペアでのダンスが主流だ。踊り子は流民以外にはおらず、一般の人が同様の舞を披露するのははしたないと言われていた。しかし、ここ数年でそのイメージが払拭された場所がある。

「母さんのお陰で、踊り子の舞も公爵領都で流行ってるし、ここらで印象変えてみるのもいいんじゃないかと思ってる」

セイスフィア商会で売りにしている学習講座。趣味全開のものもあるその中で、かなりの人気を誇るのが、流民の踊りや新たに作り出す踊りを習得するダンス講座だ。

嫁入り前のお姉さん達から、子育ても落ち着いて一人で新しい何かをしたいと思うおばさま達まで、幅広い年代の女性達が踊れるようになっていく。

公爵領都はセイスフィア商会の本店があり、フィルズの生家がある。これらの領地への貢献や功績は公爵家の次男としても、公爵家の第二夫人としても十分過ぎるものだろう。

「もちろん、ばあちゃんや母さんが一人で大きな舞台で……あの公開審判の時の舞台とかで踊るのも見たいけど」

「やりたい！ あんな大勢の前で踊るとかやってみたい！」

クラルスは広告塔なので、休憩所や商店の所々にあるモニターには、彼女が一人で舞う映像などを流しているが、生で披露する機会は用意できていなかった。

「母さんならそう言うと思った。それでさ、劇場ってのは、屋内でそういう舞台を鑑賞するための場所なんだ。外の雑音が入らない、演者と観客だけの場所」

「っ、あ、あのいつもの中央の舞台を屋敷の……大きな一部屋に入れちゃう感じ？」

実演販売や、新たな商品の発表など、セイルブロードと名付けた商店街の中央にある大きなモニターの置かれた舞台に、クラルスは毎日のように立っている。その舞台のことだ。

「そう。音響にも拘って、そこではひととき現実を忘れられる。そんな場所だ。それを作るからさあ、母さんは演者を育ててみないか？」

「演者……語り部じゃなくて、あの再現の時にやったみたいなの？」

「そう。今度は物語で」

「っ、やりたい」

見たこともないほど真剣な顔になったクラルス。そうすると、年相応の大人の女性に見える。い

つもは天真爛漫過ぎて、フィルズからすると手のかかる妹のようにも思えてしまう時があるが、今は違う。ピリリとした空気を纏った大きな何かに挑もうとする強い女性だった。

「じいちゃんが良ければ演奏する奏者を育ててもらおう。複数人での合奏を目指して」

楽器もいくつか揃える必要が出てくるだろう。その辺りにも手を入れていく。

「ばあちゃんにはダンサーを。演出として見せる複数人でのダンスを考えてもらおうと思ってるんだ」

個で主張するのではないバックダンサーを主に育ててもらおうつもりだ。

「引退しようとしている流民の人達を呼んで、手伝ってもらえないかとも考えてるんだけど、どうかな」

「連絡とってみるわ！ 父さんと母さんにも話をしてくる！」

「助かる。長期計画でいいから、やってみてよ。これ、企画書な。じいちゃんとはあちゃんに見せてみて」

「分かったわ！ ふふふっ、楽しくなるわ!!」

そう言って、クラルスは興奮気味に談話室を飛び出して行った。

そんなクラルスと入れ違うように入ってきたのは、この国の王のファスターとフィルズの実父で宰相である公爵のリゼンフィアだった。

「珍しいな。こんな昼間から来るなんて」

「ちよっと相談に乗って欲しくてな……」

「ふうん？ 執務室に行こう」

国王の相談役のようなことをしているフィルズからすれば、いつものこと。少し表情が固いのは気になるが、何か言いにくそうな様子の二人を不審に思いながら、執務室へと向かった。

執務室でファスター王とリゼンフィアと向き合ったフィルズは、変わらない二人の顔色を見て、切り出した。

「で？ 何かあったのか？」

「あ、ああ……ユゼリアのことだ……」

「は、ようやくメルナ妃のカタをつける気になったのか」

「うむ……」

公開審判が行われたあの日、第一王妃であったメルナ妃は監禁されることになった。

第二王妃暗殺の容疑では捕らえられなかったが、メルナが着けていたネックレスと腕輪が魅了の力を持った賢者の遺物だったことで、王宮内の秩序を乱す行為とみなされ、捕縛となったのだ。

とはいえ、そのネックレスなどをどこから、どういった意図や経緯で手に入れたのか分からないことと、王妃という立場も考慮し、表向きは謹慎処分となっていた。

「あれから半年ちよいか。えらく掛かったな」

「フィルが罪人達に着けてくれた、あの嘘が吐けなくなる金の腕輪をしていても、中々真実を話さなくてなあ……」

「嘘は吐けなくても、沈黙はできるからなあ」

「うむ……しかし、弱ってきてはいたのだ……食事が嫌で、ほぼ手をつけなくなっていたらしい。

食べていたのは、パンの中心の辺りだけだったと」

「あ、なんだっけ。にっがいスープと酸っぱいサラダとジャリジャリの甘いパンだったか。アレ、採用したんだって？」

一発殴りたかったという第三王妃フラメラの溜飲を下げるために、フィルズが提案した罰の一つ。暗殺の濡れ衣を着せられ、様々なことで悪者とされてしまった彼女には、実際、殴る権利があった。冗談のつもりだった罰の提案を、実際に採用したらしい。

リゼンフィアが少し笑う。

「捕らえた貴族達にもかなり効果があった。味覚が麻痺してきたようで、食べる気もしくなくなった頃に、『早く自供すれば、修道院の方できちんとした食事ができるようになるかもな』と囁いた次の日に、大抵必死で自供してくれたよ」

「すげえじゃん！ 効果抜群！」

同じように様々な罪で捕らえられた貴族達にも効果があったらしい。美味しいものを知っているだけに、辛かったのだろう。生きるために無理やり食べるくらいならば餓死したいと思うほどに、まともな食事への思いは強くなる。

「下手な拷問よりも効果があるようだ。だが、貴族限定だな。平民の方では次第に慣れたらしい。とはいえ、教会に引き取られれば、これよりもまともな食事ができると聞いて、自供する者は多いよ

うだが」

「食って大事だよな」

これしかないからと、不味い食事に慣れたとしても、これより良いものと聞くと期待してしまう。あの食事に比べたら、焼き芋や蒸かし芋一つでもご馳走になるだろう。

「それにしても、メルナ妃は保ったな」

フィルズは素直に感心していた。もっと早くに音を上げると思っていたのだ。ファスター王も、ここまで時間が掛かるとは思っていなかったのだろう。疲れた様子が増した。

「……あれは意地と見栄の塊だ。謹慎させられても、王妃の座にあれば良いと思っていたようだ。何一つ王妃としての仕事もせず……くだらん」

ファスター王は、とつくにメルナを見限っていた。しかし、それをメルナが受け入れられるはずもなく、この世界の貴族女性特有の、自分に都合良く変換する技をもってして、勘違いに磨きをかけていたようだ。

「『王妃である私がいなくなるのは困るでしょう？』『私ほど王妃としての顔が似合う者はいない』などと……あの頭の中はどうなっているのか……もはや、今までの姿が思い出せん」

体は弱いが、清楚で可憐な王妃との評判をこの何十年と纏って多くの者達を騙していたメルナは、今や見る影もなく部屋で喚いたり、暴れたりしているようだ。

「腐った花畑か、発酵して虫の湧いた糞クズが詰まってんだろ」

「肥料にもならないか」

「残念だよな」

誰がどう見ても処置なしだ。

「あまりにも埒が明かぬのでな……ユゼリアがお前のせいで廃嫡になるだろうと言ってやったんだ。そうしたら、醜く顔を歪めてペラペラと喋り出した」

「ははっ。メルナ妃にとつてみたら、全部最終的にはユゼリアを王にするためのものだっただろうからな。自分の地位を確実なものにするためにも。そこんとこ、映像は？」

この問いかけに、魔導人形の隠密ウサギが一匹、ファスター王達と挟んでいるテーブルの上に落ちてきた。

《保存済みです。現在、編集を進めております。是非、他の貴族の方々の前での断罪の折や、演技の参考にお使いください》

「だってよ」

「う、うむ。感謝する」

《では》

隠密ウサギはスッと跳んで扉から部屋を出て行った。

「ユゼリアの廃嫡の発表もするんだろ？」

「……それは……」

「ん？」

躊躇うようなファスター王の様子に首を傾げていれば、リゼンフィアが代わりに答えた。

「陛下は、ユゼリア殿下の廃嫡を迷われている」

「は？　なんでまた」

「……私は、アレを見捨てないと伝えている……」

「あ……なるほど？」

血縁判定機によって、二人は実の父子ではないと証明されたあの日、確かにファスター王は第一王子であるユゼリアにそう言った。

「はあ……今のユゼリアを見たか？」

「……どういうことだ？」

「ファシーより前を向いてるってことだよ。ほれ、ちよい行くぞ」

「……どこへ……」

有無を言わず、ファスター王とリゼンフィアについて来いと告げ、フィルズは階下の工房の一つへと向かった。

二階は主に身内で使っており、一階には食堂や従業員達が自由に使える工房や談話室がある。工房はいくつかあり、主にこれらは商品開発に使うのだが、もちろん趣味人なフィルズが組織の一番上にいるのだ。休みの日など、自由に使っても良いことになっている。

工具を使う工房は防音になっているし、換気についても考えてある。設計図など大きな書類を書くための広い机や、大きな製図台であるドラフターしつちを設えた部屋もある。

それらの部屋は、学校のように廊下から中が見えるようになっていた。その一つに、油絵用のキャンバスを立てて絵を描いている男性と、それを囲むようにしているユゼリアと女性の背中が見えた。

「あそこ」

そこでは、ユゼリアが本当の両親と共に楽しみに談笑していた。父はセクラ伯爵家のゼレイユ、母はメルナの異母妹にあたるサリアという。

「ユゼリアと……サリアとゼレイユ殿か……三人はよく……？」

「会ってるぜ。ユゼリアは今年学園を卒業だし、三年は授業が他の学年より早く終わって、自習時間が取られるだろ。そこで早く切り上げて二日に一度と週末は、仕事の終わった二人とほぼ一緒にいるな」

これまで失っていた親子での時間を取り戻すようだと言ったのは、一緒に学園に通っている王族の学生組だ。彼らは微笑まじげにそんなユゼリア達親子を見守っている。

この時ばかりは、いつもなら側近として側にいるワンザも席を外し、別行動だ。

因みに、恐らくワンザの方は、食堂で夕食の準備をしているクマにしごかれていたところだ。ユゼリアの近くでウロウロ、ウジウジしているくらいなら手伝えとクマに拉致らちされたのがきっかけだったらしい。

今は泣き言も言わず、クマを師匠とまで呼んで当たり前に手伝っている。ユゼリアの口にしたことや行動を日々褒め称えることしかできなかった者としては、成長したと言えるはずだ。

ファスター王とリゼンフィアがそつと窓を覗き込んでいる横で、フィルズは壁に背を預けて腕を組んで告げる。

「この場合の『見捨てる』ってのは、生かすための行き先も用意せずに放り出すってことだろ？ 行き先をあいづ自身に選ばせて、手を離してやるなら見捨てることにはならないさ」

「そうか……行き先があそこなら……」

「ああ。悪くないはずだ。それによつて、王族としての籍を失つても、正しい所に納まるだけ。寧ろ、生きやすいんじゃないか？」

ユゼリアの横顔は、とても自然に笑っているように見えた。ファスター王とリゼンフィアにもそう見えたようだ。

「楽しそうだな」

「あのような顔もなさるのですね」

王宮では見ることのなかった表情だと、二人ともが思ったらしい。

フィルズもここでユゼリアを見て来て、王宮に返すべきではないと思うようになっていた。

「多分、血筋については誤魔化さないう方がいい」

ユゼリアの横顔を盗み見ながらフィルズはそう告げた。

「メルナ妃がいなくなつても、あいつはもう、王宮で自分の存在意義を見出せない」

「第一王子としての立場も……ということか……」

ファスター王は、悔いるような目をしていた。血縁を確認しなければ良かったのかもしれないと

思ったのだろう。ファスター王がユゼリアの血筋の真偽を明らかにしたかったのは、あくまでもメルナ妃を追い詰めるためだった。ユゼリアをも追い詰めることになるまでは考えていなかったのだ。なんとしてでもメルナ妃を逃さないための一手だった。

フィルズには、そんなファスター王の考えが見えていた。

「ファシーはユゼリアを追い詰めることになつたって気にしているかもしれないが、俺は最初から正しい位置にあいつを立てさせてやりたくて血縁判定機を作つた」

「そうだったのか？」

「ああ。賢者はアレを、血筋を否定するために作つた。責めるために作つたが、俺は救うために作りたかつた」

人と人の関係を壊すために道具を作り出した賢者。だから血縁判定機は存在を消された。誰もが必要とせずとも、アレがあれば何かあつた時に安心できる、という位置付けにして残すべきだった。その発明がどのように次に発展していくのか、それが大事なはずだ。

「道具は人に求められて誕生する。人でも物でも、そうやって、望まれて存在して欲しいんだ。そこからまた、すげえのが生まれるはずだからな」

「……すごい考え方だな……そうか、望まれて……」

「人も……か」

何かを考えるような二人の様子は気にせず、フィルズは続ける。

「血縁判定機もさ……血筋を疑うつてことは、家族の関係が上手くいってないつてことだろ？ 前

にも後ろにも行けない状態で平行線。そのまま受け入れるか、きっぱり縁を切るか、そんな結論も出せない状態ってことだ。それは……苦しい」

「ずっと正解が出ないのは気持ち悪い。」

「ほとんどの人ってさ。問題の答えを知らずにはいられないだろ？ 無理やり答えを出して納得しようとしても、何かモヤモヤしたのが残る」

「ああ……やはり違うのではないかと、後から思うやつだな。アレはかなり後を引く……」

「気持ちが悪いですよね……」

常に答えを決定する立場の二人にはよく分かったようだ。

「確かな答えが出なければ、前に進んでも後退しても後悔が残る。それを解決できるなら救いになるだろう」

正しく判定を下せる道具は、求められるものだ。

「ユゼリアも、自分の正しさが分からなくなっていた。メルナ妃を信じていいのか、カリユ達の言葉信じればいいのか。やらかした後、アレはかなりこたえてた。カリユ達に振り回されて戸惑ってもいたがな」

第二王子である異母弟のカリユエルと第一王女で異母妹のリサーナに引つ張り回されるのは、端から見れば微笑ましくもあつたが、長年信じてきた母親の教えが、決して正しいものではなかったのだと知って、とても不安そうだった。

「同時に、多分本人は気付いていないかもしれないが、将来の不安つてもあつたみたいだ」

「……王太子となることにか？」

「ファシーには覚えはないか？ 自分がいざれ国王になってこの国を背負うことに不安になったことは？」

「ある……」

「ユゼリアも自覚する時期だったんだ。まあ、最終学年だしな。俺的にはちよい遅いと思うけど、貴族の子どもなら早い方なのかも」

そのまま流されて、いつの間にか当主になっており、自覚もないままに結婚して、家族が出来て。それでも自覚しない人はしれないかもしれない。

「自分の判断で、他人の人生を左右するつてのは、自覚すると怖いもんだ。そこに、今まで自分の判断ではなく、母親の言いなりだったということを実感したら、一人で立つ不安つてのを感じて怖気付くのは不思議じゃない」

一人で判断する経験をずっと取り上げられてきたユゼリアには、自分の判断で行った学園でのやらかしが、怖い汚点となった。

そこで、将来メルナ妃の言うように王になった時上手くやれるかどうか、メルナ妃がいなくなったら自分はどこでどう判断を下げばいいのか。その不安は顔に出ていたように、フィルズには感じられた。

「真に頼るべき人が他にいないらだつてことを、ユゼリアに教えてやりたかつたんだ。失敗を取り上げず、誤魔化さず、一緒に立ち向かってくれる人こそ頼るべきだつてさ。メルナ妃はダメだつて教



えてやらないと、あいつも一緒にダメになるのは分かりきってたし」

一緒に墮おとす気はなかった。

「メルナ妃を否定した甲斐かいはあったよな。あいつは今、前を向いてる。それで、急速に本当に愛されるってのを感じてる」

「うむ……あのままでは、アレの操り人形でしかなかった。そう、私も思っている。偽りの愛情など見ていても気分が悪い」

「それが分かっているならさ。あいつに選ばせてやろうぜ。どこで生きるかを」

そこで、ユゼリア達がこちらに気付いた。

もっと早く話し合うべきだったというのが、ファスター王の言葉だ。

話し合いをするにあたり、執務室の方にユゼリア達親子を連れてきた。さすがに、談話室では話せない内容だ。

そこでじつくりと話し合いをして、ユゼリアも廃嫡はいていということに納得した。

「その……寧ろ、血のつながりもないのに、心苦しかったのです」

「っ、いや、だが……このことに関して悪いのは全てメルナだ。それに気付かなかったことについては、私にも責任がある」

それで、せめてもと、問題を保留にしていたというわけだ。

「いいえ。私が何も考えずに言うことを聞いていたのもいけなかったと、今なら分かるのです。だ

から、第一王子という立場もなくいい」

「ユゼリア……っ」

大人達の誰もが息を呑んだ。ユゼリアは覚悟を決めようとしていた。纏う雰囲気は決然としたものになる。

ユゼリアは真っ直ぐに目の前で向かい合うファスター王を見つめる。未だかつてないほどその視線は真っ直ぐだった。

「王族としてあるならば、間違いは正すべきでしょう。私のことは、王家の汚点にもなり得るものです。あつてはならない」

「っ、汚点などっつ。そのようなことは誰にも言わせん！」

「いいえ。王家の血筋でもなく、王妃とさえも血の繋がりのない者を、王族としてはいけません。それが許されたなら……っ」

ユゼリアは少し俯いた。表情を歪めるユゼリアに、大人達は慌てる。子どもに、これほどのことを言わせていいのかと焦る。

しかし、次に意を決したように顔を上げて泣きそうな表情でユゼリアが告げたのは、この場の誰も予想していなかったものだった。

「それが許されてしまつたらっ、父上はフィルさんを養子に望みませんか!? 王太子にしくなるのではありませんか!？」

「はっ！」

ファスター王が覚醒したようにはっとし、リゼンフィアとサリア、ゼレイユは絶句した。当のフィルズは何を聞いたのか理解が追いつかない。

その勢いのままユゼリアは続けた。

「そんなことになつたらっ、恨まれるのは私ですよ!! クーちゃんママ達に嫌われたくありません!!」

「っ、その手があつたか!!」

「やめてください!! ほら、宰相がっ、見たこともないくらい凶悪な顔をしています!!」

嫌だ嫌だと涙目で頭を抱えて悶え、リゼンフィアの射殺すような視線を避けようと目を泳がせるユゼリア。

そんなユゼリアを間に挟みながら、サリアとゼレイユもはっとして息子を庇うように両側から抱きしめる。そして、一緒に震えた。

「ううっ……クーちゃんに恨まれるのは嫌だわっ……師匠にも顔向けできなくなるっ」

「会長を取られたなんてことになつたら、職員全員が暴動を起こすんじゃないよっ……怖いよっ! 普通に国が落ちそうだよっ」

恐ろしいと言つて親子で震える。その一方で、ファスター王は天啓を得たというように晴れやかな顔をしている。

「なぜ気付かなかった……? フィルが王になるなら、カリユエルやリュブランも喜んで補佐をやるだろうっ。セルジュ君も当然だが、家を見捨てたこの優秀な元子息達まで戻ってくるんじゃないな」



そんな言い合いをする二人に、フィルズは馬車置き場へと向かいながら苦笑する。

「いつも忙しく交流しているのは知ってるぜ？ オヤジさん達と裸の付き合いとか言って浴場にいたと思ったら、プールで若いのが競泳？ 町のお母さん達とケーキ屋でお茶して、女の子達とマナー教室や語学教室だったけ？ 神官達から捕まらないって連絡来る時があるんだが？」

分身しているのではなからうかと思うほど、神出鬼没しんしゅつきぼつ。それも、公爵領だけでなく、王都にも出没する。神殿長も通信具であるイヤフィスをつけてはいるが、あえて無視する時もあるようだ。まあ、誰かの相談事を聞いている時には応えない。

人との交流が多くなれば、必然的に応答できる時は限られてくる。そうになると、居場所の確認のため、フィルズの方に連絡が入るというわけだ。隠密ウサギが神殿長の居場所を把握していないはずがないと、神官達も知っている。

そんな毎日が、神殿長にはこの上なく満足いくものらしい。少し誇らしげだった。

「かつてないほど、とても充実した日々を送っていますよ」

「いいな。私もここに住みたい」

「レナ姉ねえは常に移動するのが楽しいって言ってたじゃん」

レナは商人としての顔も持っている。大聖女の商会は世界中で有名だ。

「まあね？ 新しい商品を仕入れたりするのとか、その土地に行ってみないと良い物かどうかも分からないし。私自身で判断したいから人任せにもしないけど。でも、ここを知っちゃうとね〜」

今やセイスフィア商会のある所は、世界でも類を見ない大人気の娯楽施設になっている。

「商品も、ここにいた方が面白いのが手に入るしっ。あのエアータント、ヤバいわよ！ 冒険者だけじゃなくて商人や貴族にもバカみたいに売れるからっ」

「あははっ。お陰様で、大型のは半年先まで予約で埋まってるよ」

比較的制作りやすいため、それほど予約も抱えずに済んでいるとはいえ、生産所は常にフル稼働していた。

「あ、折り畳み椅子って、今どれだけ出せる？ 修道院でいくつか注文入ってるんだけど」

「それなりの数揃ってるぜ？ ただ、カラーバリエーションが増えたから、後で見に行つてよ。街中で使う用に、派手なの増やしたんだ」

「なにそれ！ 赤とかある!？」

「あるぜ。あと、折りたたみ式のテーブルも」

「ヤバいわ！ 確認する！ もうっ、ここに来る度たびに新しい商品が出来てるんだものっ。うっ……悔しいけど私は留まれないし……ウチの子を置いていこうかしら」

最新の商品の仕入れ契約が遅れるのが、レナにはもどかしくなっているようだ。

「そういえば、あそこ、また何か建てるの？」

不意に見えたのは、フィルズが先日買った土地だ。住居が五つくらいあったが、既に取り壊していた。

「まあな。明日から建築にかかると、出来上がるのは三ヶ月後くらいだな。それくらいにまた来てよ」

「分かったわ。本当に色々思いつくんだから」

少し呆れた様子のレナ。そして、馬車置き場に着いた。そこには、三台の護送車を囲んで神殿騎士達が待つていた。とはいえ、ただ待つていたわけではなく、話し相手はいたようだ。そこには和やかな雰囲気があった。

「では、キラ様の喫茶店での一推しは、Cセツトなのですね！」

《うむ。程よく甘い餡子のアイスとふわふわのロールパンが今の時期は絶品である！》

「キラ様、餡子好きなんですわね。分かります！ ケーキ屋の新商品の水まんじゅうも美味しいと聞きましたよ！」

《アレか！ 冷えたのがまたいいのだ！》

「それは確かに。私はその水まんじゅうをお土産にすると決めました！」

「私はやはりパンですね！ アンパン！ アレは疲れが取れる上にお腹も膨れて最高です！」

《うむ！ 餡子は至高なり！》

「同感です！」

ビズの背に乗ってゆらゆらと機嫌良く尻尾を揺らす黒いドラゴン。それを囲んで、騎士達が興奮気味に餡子について語っていた。

「キラ……」

《む？ おお。主殿。時間か？》

「ああ……キラはまた餡子の普及活動か……」

《ふつ。当然である！ アレを知らずによく生きてこられたものと、日々過去を振り返っておるよ》

「気に入り過ぎだろ……お陰で餡子のメニューが大発生中だ……」

《良いことだな！》

黒い鱗がまるでキラキラと光る夜空の綺羅星のようだから、クロ改め、キラと名付けたドラゴンは、すっかり餡子の虜だ。甘党という程ではないため、程良い甘味に調整している。とはいえ、食に目覚めたキラは、常に新たな物を求めて食べまくっていた。

《やあねえ。甘いものばかり。太るわよ》

そう言って馬車の屋根の上から飛んできたのは、赤いドラゴン。茜空のような柔らかな赤色を持つことから、アカネと名付けた。世話好きなお姉さんだ。

《ふん。そういうお前は辛いものばかり食べたがると、食堂のクマ殿を困らせておったではないか》

《あの刺激がいいんじゃない！》

《カッカとし過ぎるのも問題だろうに。性格がこれ以上キツくなるのはいただけんぞ》

《辛いもの食べたからってそんな風にはならないわよ！》

こうした不毛な言い争いが起きるのも今では日常茶飯事だ。そして、これを収めるのは末っ子のジュエルの役目だ。

《なに〜？ アカネ姉もキラ兄も元気だね〜。ボクはねえ、甘いのと辛いのを交互に食べるのが良いと思うよ？》

《うつ、うむ……》

《そ、そうね……口直しはあっても良いかしら……》

因みに、名付けにあたっては、キラとアカネがかつて仲良くしていた賢者に教えてもらったという言葉を採用している。どちらにも空に関係したものだっただけだ。

《うん。けどねえ。ボクはここで食べるものは全部好きっ》

《そうだな。うむ。なんでも美味しいな》

《美味しいものばかりよねっ》

《えへへ》

《うむうむ》

《うんうん》

こうして落ち着くというのがいつものパターンだ。大変仲がよろしい。末っ子最強。策士とも言う。

「よし。落ち着いたところで、出発するか。尋問とかメシが不味くなるからさっさと終わらせようぜ。美味しく昼メシを食うために」

「『ご飯のために！』」

「ですね！」

「やる気出るわ！」

これから行くのは気が滅入る所だ。とてもゆるい気合いの入れ方だが、活力にはなる。それで良

いと誰も疑問に思うこともなく出発した。

王宮にある騎士団の宿舎の隣。そこには、セイスファイア商会で作り上げた立派な獄舎があった。隣にある騎士団の宿舎と見比べて言えることは一つ。

「……なんて言うか……悪いな……」

フィルズがそれを見上げて思ったことを口にする。答えたのは、隣で見上げていた人物だ。

「ウチの宿舎より立派に作ってたって自覚はあったのね」

「まあ、ちょい気合い入れ過ぎたとは思ってた」

フィルズ達を出迎えてくれたのは、王国騎士団長のラストリユートだ。そして、そのまま獄舎の所まで先導してくれた。搬入口の一つが近いため、何台も続く馬車も問題なく入ってくる。

「本当に、立派ですよね。その上、どんな牢獄よりも堅牢で、脱走など不可能なのでですから、安心ですなえ」

神殿長も感心しきりだ。それを聞いて、レナが思い出したというようにハツとしてフィルズに詰め寄る。

「そうだったわ！ フィル。ここの設計図を見せてもらえないかって言われているのよ！ いいかしら！」

「ん？ 誰から？」

「聖者の一人なんだけど。武神カザン様からお聞きになったらしくて」

「へえ、いいぜ？ 用意しとく」

「っ、助かるわ！ これであいつへの借りも返せる！」

「なんか知らんが良かったな」

飛び上がる程喜び、すぐに不敵に笑うレナに、ロクな付き合いじゃなさそうだと察し、フィルズは相手の詳細を聞くのはやめようと判断した。

「じゃあ、中入るわよ」

「ああ。頼む」

ラストリゾートに案内され、一行は中に入る。因みに、ジュエルとキラ、アカネは姿を隠してついてきている。そのままの状態で今回の面会相手達を見極めるつもりようだ。

建物は、コンクリートのようなもので固められている。しかし、コーティングした白く薄い木の板を壁の全面に貼っているため、内部もとても明るく見える。

「あまりにも綺麗で、獄舎であるというのを忘れそうですね」

「本当よね……ジメジメした感じで薄暗いのが普通なのに……これでは、どこに来たのか分からないわ」

「そうですね。中も立派なんで、宿舍と交換して欲しいと言います」

少し責めるように三人がフィルズの方を向く。中までついて来た数人の聖騎士達もキョロキョロと遠慮なく物珍しそうに見回していた。

「だってさあ。囚人はジメジメで暗くてもいいが、看守とか見張りの兵や出入りする人らにはいい

迷惑だろ？ ここに入るのも嫌だって思うときあ、仕事にも身が入らないし」

ずっと日中も薄暗い所で、それも空気も悪い所での見張り。気分がいいはずもない。

「確かにそうね……看守や見張りはそういう仕事と思っていんだけど……別に看守は悪いこととしてないし……」

「だろ？ 職場の環境は気を遣ってやるべきだ。それも、犯罪者を見張る役目だぞ？ しつかりしてもらわないといけないのに、やる気を削いでどうするよ」

国を、人を守るために犯罪者を見張っているんだと思えば、誇らしくもあるかもしれないが、それで自分が体を壊しても良いというわけではない。自己犠牲を正当化する場になってはいけないだろう。

「聞いたけど、看守やこの見張りって給料があんま良くないらしいじゃん？ なんか左遷されて来たのが多いらしいし」

「あ……戦闘能力が低くて、騎士としては向いていないけど、騎士としての立場は持っていたって子や、上官に逆らって飛ばされた子になるわね……」

「それさあ、万が一脱走とかしそうな凶暴な奴がいたら対応できねえじゃん。あと、恨み持ってるような奴を犯罪者の傍に置くとか、何かの拍子に共感したら事だぞ」

「考えてもみなかったわ……今までの記録、確認してみるべきかしら。やらかしてそうね」  
暴れるのを取り押さえることだつてあるかもしれない。そんな時、戦いに不向きな者が役に立つはずがない。逆恨みでなく、正当な恨みであつても、納得できない思いを抱えた者が、その怒りを

抑えきれなかった者の傍にあればどうなるか。下手をすれば同情してしまうかもしれない。同意してくれる人を得てしまったら、今度は実力行使に出るかもしれない。恐らく、いくつかこれまで事案があっただろう。消された記録が。

「役割をちゃんと理解して勤められる人ならいいんだが、それだつて周りにはちよい下に見てるだろ。ただ見張るだけの仕事なんて認識は良くないぜ」

「……そういう仕事つて認識だけ……」

「それ、仕事としてどうよ？ やる気も何もあつたもんじゃないだろ」

「私達の印象も、見張るだけつて感じで、看守は根暗で年を取った人が一日中ここにいるだけつて思つてただけ……」

レナの言葉に、神殿長や聖騎士達も頷いていた。

「誰でもできる仕事だつて？」

「ええ。足を怪我していても、片目が見えなくても、一言も話さなくても良い仕事」

「仕事としてそれはどうよ。だから下に見られるんだ。そんなんでいいなら、街中に、畜舎のようなものでも置いて、外から誰でも見られるようにすれば事足りるだろ。人材の無駄だ」

「極端ね……けど、誰かが見ていれば良いなら、それで良さそうだわ」

誰にも中からも外からも壊せない鉄柵に囲まれた場所、大勢の目に触れれば、見張っている必要はない。ただ見ているだけの仕事ならば、これで十分だ。

「食事だつて、パン一つ投げ入れてやれば良いなら、通りがけに餌やるみたいに投げ入れてやれば

いい。それじゃあ、ダメだから牢に入れるんだろ。嫌々でも世話してやるんだ」

食事の世話。掃除。それは看守が仕事としている所が一般的だ。だが、相手は人を殺したかもしれない犯罪者で、身の危険もある。それなのに、周りからは立場を下に見られ、給料も底辺。理不尽だとフィルズは感じた。

「そんな看守や見張りの奴らが、少しでも気持ち良く仕事できるように、セイスフィア商会で監修したのがこの獄舎だ！」

フィルズは誇らしげに胸を張った。向かったのは、集中管理室というプレートが貼り付けてある大きな扉の前だった。

扉の横には、インターホンがある。それを押すと、少し間があつてから扉が自動で開いた。

中は、いくつもの画面が壁面にあり、それには獄舎内の廊下や部屋の中の映像が映し出されている。しかし映像の数に対して、部屋にいる職員は三人だけだ。

「うわあつ。もしかして、これで監視しているの？」

レナが目を輝かせて画面の方に歩み寄って行く。

「いや。記録室みたいなものだ。ここでずっと監視つてなると、人には辛いからな」

「そうなの？ これで見張りは十分だと思うのだけど？」

「何かあつた時に取り押さえるのは人だからさ」

「見張りは要るつてことね」

この記録室があるからといって、現場に立つ見張りを無くすというわけにはいかない。「各領地でも使えるかどうか、ここで試験中ということでしたが……実際、どうなのですか？ セイルブロードの管理と同じで？」

神殿長もモニターを興味深げに見てフィルズに確認する。管理の仕方は、既にフィルズの屋敷で見て知っているため、どこが違うか確認したいようだ。

「いや。ウチは隠密ウサギやクマ達にこの映像データも繋げてあるし、ウサギ達の見ている映像も確認してる。だから、何かあれば現場に迅速に駆けつけられるようになってるんだ。ここにはそこまでの機能はつけていない」

「待って？ もしかして、フィルの所の警備体制を一般に適用させようってこと？」

フィルズと神殿長にとっては当たり前なので前提説明を省いてしまったが、レナには話してなかったかもしれない。実は、神殿長としては、今回の出張は罪人の引き渡し立ち合いの方がいいので、この視察がメインだ。

「そうだけど？ だから試験中。さすがに隠密ウサギを貸し出す気はないからなあ」

「うっ、惜しい気はするけど、アレは普及させちゃダメなやつよ……ウサギさんはダメ……」

「クマはいいんだ？」

現在、レナには三体のクマを派遣している。既に、レナの店の主要拠点に二体。一体は補佐としてレナについて回っている。お陰で、護衛要らずだ。

「もちろんよ！ あの子達のお陰で仕事の効率が五倍ぐらい上がっているわっ。今更返せないわ

よっ」

「おっ、しばらく契約は継続だな。まいど」

「くっ……まんまとやられたわ。試験運用の期間が終わっても、年間の継続契約を解除する気が起きないっ」

レナは完敗だと涙を呑んだ。そんな様子をチラリと見ただけで神殿長はモニターに視線を戻す。

「ふむ……これだと、基本見ているだけですか……こんな大掛かりなものはないのでは？」

「このカメラ自体に、学習機能をつけてるんだ。クマやウサギみたいな意思表示はしないけど、ほれ、あそこ。今、カメラが人の動きを自動で感知してるのが分かるか？」

フィルズが指差した一つの画面の上の部分那点滅するように光る。その映像では、男性が一人倒れるところだった。ズームされて男の顔色などを確認。その後、画角が引いていくと、見張りの兵士が駆けつけているのが映った。

「映像が近付きましたね……もしかして、こちらで操作してはるわけではないのですか？」

部屋の中の職員は慌てずにその画面をチェックしており、カメラ前にいる人とだろうか、マイクを持って話している。

「カメラの方が自動で異常を感知するんだ。おかしい行動をしていたり、体調が悪いのも検知する」

「体調も？」

「そう。まだ試作だけど、まあ、これではほぼ完成するかも。スキャンして心音から体温、筋肉量、

水分量、<sup>びょうりょう</sup>病巣の位置まで分かるカメラ。やっぱ、健康診断って大事だからさあ」

「……健康……診断……それは、アレに写した人の病気が分かる……とか？」

「その通り！ バリウムも胃カメラも、血液検査もしなくても分かるとか、マジ反則だぜっ」

「これも……賢者の？」

「ああ。昇級試験の時に、ほぼ国内全部を回るようになって、ついでに国内の遺跡は全部確認できたんだよ」

意図せずに回り終えることができたのは幸運だった。本来はこのカメラと治療台がセットになっており、名を【人間ドックくん】と言うらしい。その魔導具の見た目は、ダックスフントのようだったので分からなくもない。賢者のネーミングセンスはある意味極まっている。

「因みに、今倒れたのは空腹らしい」

「「は？」」

神殿長とレナ、ラストリユートは、思ってもみなかった原因にポカンと口を開けた。

画面には、異常に該当する番号が二つ表示されていた。【空腹】と【低血糖】だと分かる。

「アレだ。あの嫌がらせな食事に耐えられなかったんだろ。それで、食べずにどうにかなら出られるとでも思ってたんじゃないか？」

「それはどうするのです？ 餓死なんてさせられませんよね？」

神殿長の確認に、フィルズはふっと笑った。

「そこまで我慢する根性はねえって。それに、倒れるくらい調子悪い奴は、苦くて渋い栄養満点な

薬草粥<sup>がら</sup>を無理やり食わせることになってるから」

これにラストリユートとレナが顔を引き攣<sup>く</sup>らせる。

「……どつちが良いかとなれば……我慢して普段の方を食べそうよね……」

「苦くて渋い方が我慢し辛いんじゃないかしら……」

ここで、神殿長は記憶を探っていた。

「いつもは、苦いスープに酸っぱいサラダ、ジャリジャリする甘いパンでしたか？ それと辛味のあるジンジャードリンク……そちらを少しずつでも食べる方が、薬草粥をたくさん食べるよりはいいでしょうに」

「だろ？ まあ、味はともかく、ちゃんと栄養とか考えたメシなんだぜ？ もちろん、薬草粥もちゃんとしたやつだ」

不味いけれど健康に良い。不味いけれど病氣も治る。問題などない。

「そう考えると、良薬が苦いのは普通ですしね」

「そうそう。けど、味覚が麻痺する前に猛省して欲しいよな」

「麻痺してしまった場合はどうなるの……」

ラストリユートは不安そうだ。

「だから一応忠告してもらってるんだけどな。きちんと自白して、反省しないと美味しい物の味も分からなくなるぜ？ って」

「……早くしないとここから解放されても苦しむのね……」

ラストリユートは顔色を悪くする。想像したようだ。ただでさえ、彼はセイスフィア商会で良い食事をしている。アレが美味しく感じられなくなったら、と怖くなったらしい。

これに対して、レナは呑気だ。他人事感がある。

「いやだわ。食事の楽しみがなくなったら、人生に色がなくなるようなものよね。その辺使つて脅してみようかしら」

「ちよつとは素直になるかもな。大聖女様に諭されたら余計にさ」

「ふふふ。任せて♪」

レナは早速ラストリユートに案内を頼んで、聖騎士を連れて部屋を出て行った。

「では、フィル君。私達も行きましょうか。地下でしたよね」

「ああ。あの組織の奴らの話を聞かないとな」

そこで、キラ達が姿を少し見せた。因みに彼らはフィルズにくっ付いている。キラはフィルズの右肩、アカネは左肩でジュエルが頭にぶら下がっていた。どうやっているのか知らないが、触れられているのは分かっても、重さはさほど感じていない。

《我も気になっている。どんな言い訳を並べるのか聞いてやろうではないか》

《そうよね。まさか、賢者の子孫だなんて。私達の前でよく言ったものよ》

二人の鼻息は荒い。そんな中、ジュエルだけが呑気に尻尾を振り、何気なく告げた。

《二人だけ、本当に賢者の血を引いているのがあるみたいだね》

《は？》

《え？》

「んん？」

「なんですって……？」

思わぬ言葉に、一同はビタリと動きを止める。そして、揃ってジュエルに注目した。

《ん？ どうしたの？》

「……ジュエル……なんでそれが分かった？」

キラとアカネの反応を見ても、普通は気付けないことのはずだ。

《血の繋がりは分かるよ？ んん、つ、托卵種判定機を作った賢者と一緒にいたことあるから分かるよ？》

よ？》

「……血縁判定機な？ なるほど……」

《……そういえば、何人かの賢者と共に過ごしておったな……》

《っ、アレね!? おかしくなって飛び出して行った一人目の子！ 見ていて早く離れなさいって言った子だわ！》

《先にあの子の方が出て行っちゃったけど。何回かは帰って来てたけど、ケタケタ笑うようになってたから、ちよつと怖かったやつ》

「……やべえじゃん……よく一緒にいたな……」

《何か放っておけなくて》

仕方のない子だったのだ、とため息混じりに告げるジュエル。キラ達と合流してから、ジュエ

ルは封じていた過去の記憶を思い出し始めたようだ。ふとした時に鮮明に蘇よみがえるのだと聞いている。その賢者は、かなり精神状態が危うかったようで、見捨てることはできなかったと言いう。

「なるほど……けど、よく分かるようになったな」

《うん。あの子には言わなかったけどね。なんか危なそうだった》

「言わなくて正解だ……」

《末っ子よ。危ない者には同情しても近付いてはならんぞ》

《そうよ？ 気を付けて？》

《はい》

そんな注意をされながらも、ジュエルはご機嫌のようだ。兄妹に心配されて嬉しいのかもしれない。それも、こんなに近くで直接注意されることが、未だに新鮮らしい。

三体のドラゴンは、この世界の創造に関わっている。しかし、あまり三体揃って行動することはなかったようだ。キラとアカネに至っては、人との共存を早々に諦めて眠りに就いてしまっていた。よって、こうして役目もなく自由に三体でいられるのが嬉しいらしい。

「では、そろそろまた姿を消してくださいね。あなた方を見ておかしくなる危ない人がいるといけませんから」

《うむ》

《そうね》

《はい！》

再び姿を消した三匹を確認して、フィルズと神殿長シエルは廊下を出てすぐの所にある地下へと続く階段に足を進めた。

ここの地下もそれほど暗くはない。

階段を下った所に、許可ある者しか開けられない格子の扉が二つほどあり、奥へと向かえば、円形の広い部屋に出た。

「これは……」

神殿長は目を丸くして中を見回す。

その部屋の周りはガラス張りの博物館か水族館のような造りだ。しかし、そこに入っているのは動物ではなく、罪人達だった。

中央では事務仕事をしながら見張りをする者が、現在は五人。その一人が顔を上げて立ち上がる。「どうも、フィルさん。そちらは神殿長殿ですね。本日のこの代表のネルです。尋問されますか？」歩み寄ってくるネルに、フィルズが答えた。

「自白はしているのか？」

「今日までの報告書はこちらに」

「先に確認させてもらう。その後、尋問をさせてもらいたい」

「分かりました。そちらのテーブルをお使いください」

「ああ」

広い空間だ。そこに、いくつもテーブルと椅子がある。

神殿長は席につきながら、罪人達を眺め、開放的なこの部屋を不思議そうに見回す。

「アレが壁なら、フィル君の所の談話室みたいですね。事務仕事がかかりそうです」

「ん？ まあ、実際気にならないからって、ここで事務仕事してる類いの奴らだから」

「……どういふことですか？」

フィルズは椅子に座り、報告書をめくりながら説明する。

「最初ここには、メルナ妃の父親の侯爵とか、キツめの尋問が必要な高官が入ってたんだよ」

「そういえば、地下は尋問する者を入れる場所でしたか」

「そう。上はもうほぼ聞き取りは終わってて、後は神官に引き取られ待ちの奴らが入ってる」

レナが向かったのはそちらだ。

「ここにいるのはまだ……罪の全容が解明されていない者達ということですね？」

「そう。罪の来歴は確認できてるけど、原因とか、動機とかがはっきりしてない」

神によって記録された罪の来歴が出ているため、既にどんな罪を犯したかが分かっている。しかし、人を貶めたにしろ、金をせしめたにしろ、その要因というものが分からなければ、被害者がい

るかどうかも分からない。その確認をしているところだ。

「で、高官達は、結構恨まれてた奴らが多かったんだ」

「はあ……」

下の者にキツく当たったり、無茶な要求をしたり、自分がやれもしない仕事を無理に押し付けて

きたりする高官がほぼ捕まっていた。

「あれだ。クズ上司。尊敬もできない。人としても出来損ないな最低な上司な。まあ、そんな奴らだからこそ、罪人になっただろうが」

「普段から態度に出ますよね。そういうところ。特に、下に見てる人の前では」

クズな行いをする奴は、下が訴えられないと思ってる素の顔を見せるものだ。

「それな。で、捕まったのはいいが、普段そのクズから色々言われていた奴らからしたら、『俺らへの態度や行いについては裁かれないのか？』って」

「あ、不満が出て来てしまったんですね？」

「うん。セクハラ、パワハラって訴えたところで、この世界では『そういうこともあったんですね』で終わりじゃん？」

「賠償もないとかそういうことですか？」

「ああ。でも、精神的にも肉体的にも追い詰めてきたんだから、慰謝料くらい取ってもいいだろ」

「家庭という閉じた世界で、不倫による離婚での慰謝料が請求できるなら、職場という世界で起きた理不尽で不平等な問題も、慰謝料を請求できていいのではないか、ということですね？」

「そういうこと」

婚家での理不尽な立場ゆえの心的被害とそう変わらないはずだということだ。

「でも、問題なのは、対象者が複数人いるってこと」

「ああ……離婚の話と違うのはそこですね」

「一人一人聞き取りして、慰謝料の程度を決めるってのも大変なことだろ？ 傷付いたって言うても度合いは人それぞれで、ある日の一言についても言えるんだから。その人との会話を傍で聞いていた人がいたとしても、覚えていたとは限らないし」

「……大変な調査が必要になりますね……」

「だろ？ だから、確たる証拠、証人が見つからないのであれば、慰謝料は出せないってことにして、その代わり、『恨み言ぶつけていいよ』ってしたんだよ」

「……ん？」

慰謝料は出せませんと言うだけでは、反発は必至だ。訴えているのに、悪いのはあちらなのに。だが、確かな証拠もないのに罪として裁くことはできない。仮に立証しようとすれば、膨大な時間と労力が掛かる。

そこで代替案が一つ。

「ここ、こつちからの声はあのガラスからあの線の所までの間だけ中に届くんだよ」

「あの白い線ですか？」

「うん。小さい声でも、こつちからの声はあの範囲のものは聞こえるようになってる」

ガラスから一メートルくらい手前の位置に、白い線があり、そこまでが範囲だ。

「中の声は、あの中央の机に取り付けてある専用の機材でしか聞こえない」

六人がけのテーブルの中央に、まるでコップを逆にしたようなものがかくも置かれている。そこに書かれているのは、ガラスに書かれているのと同じ番号。それぞれの部屋の音が聞こえるよう

になっている。

「もちろん、あの機材を使って、部屋の中に伝えることもできる」

コップのような見た目のものには、細いマイクも付いていて、ボタン操作でそこから声を伝えることも可能だ。その場合は、部屋の中のスピーカーから音声が行くことになる。

「あのガラスのおかげで、こつち側の様子は奴らには見えてない」

「え？ あ、フィル君の所の窓と同じなんですね？ 我々が来たことも彼らは分からないと」

どちらかの面からは見えなくなる仕様の特殊ガラスを使っている。そのため、罪人からはフィルズ達の姿も見えていない。

「そう。だからあの線から野次を好きだけ飛ばせて言うってやったんだよ」

「さっき言った、納得できない人達にですね。あゝ、こちらからしか姿が見えないから、誰が言ったかも分からず安全だと」

「そういうこと。まあ、特定できる事実を口にしたら分かるだろうが、あそこから出ることはできないし、思いつきりどうぞ？ って」

「それは……結構すごかったんじゃないやありませんか？」

「言いたいこと溜まってたからな」

それはもうギャンギャンと叫んでいった。

「言えなかったことがかなり精神を追い詰めるからさ。それでなんか、大半はスッキリしてた」  
言い返されないのだから、気持ち良く言ったもん勝ちの、勝ち確。スッキリするだろう。

「あと、反省文の朗読会もさせたしな」

「反省文？ 朗読会……ですか？」

「反省文って言っても、こっちが用意するやつ。まだこの奴らは反省する前だしな。『ごうごう、こういうことをして、私は捕まりました』ってのを分かりやすく文章にして、それを朝と昼と夕方に、ガラスの方を向いて立たせて読み上げさせるんだよ。そのノルマをやらないと腕輪とか足輪がビリビリする。ずっと。それも段々強くしてく仕様な」

「……それは……嫌がりそうですな」

「その朗読会は外にも聞こえるようにして、罵倒しに来た奴らも、行儀良くガラス前に椅子を並べて聞くんだよ。めちゃくちゃ笑いながらだけど」

「罪人相手でなければ、かなり趣味が悪いです」

「俺もそう思う！ いやあ、やべえこと思いついちゃったなっ！」

「……そうですな」

思い出してみても、あまりにもその様が滑稽こっけいだったので、フィルズも笑うしかなかった。

フィルズは、被害者達が少しでも納得できる落とし所を見つけることを優先した。そこで、どうせもう戻ってこれないのだから、言いたいことを全て言える場所を提供したというわけだ。それはまあ、正解であったと言えるだろう。

「ここでは、調書をまとめたりする事務官達が、ゆったり仕事できるように……つてのと、尋問待

ちの奴らが自白するまでに、劣悪な環境のせいで万が一にも死なないう、清潔さと健康状態を複数人で見張れるようにと頑張ってさ」

「ああ……そこで亡くなってしまう場合、見張りの者が責められますしね。その責任を分散することもできますね」

「そういうこと。目は多い方がいい。異変に気付きやすいからな。だからこそそのガラス張りだ」

何人かの看守の内、一人でも異常を感じれば罪人の状態を確認する。まずないとはいえ、毒を保持していたり、仕込まれたりしては堪たらない。

「ガラスはまず割れないし、奥のドアは一階の集中管理室からの遠隔操作でしか開かない」

この区域の入口には二重に扉があつて、集中管理室でそれぞれの場所を確認しながら、見張りや尋問官が一人にならないようにも考えている。

「相当数の目があるのですね。それで、常に捕まった者と職員の安全の確認をしながらやっていくと」

「そう」

「逃げてもある色の服では目立ちますしね」

「ヤバい色だよな！ 黄色とオレンジと赤の縞模様しま！ それも発色いいやつ！」

罪人の服は蛍光色なのだ。それをちよつとオシャレに、横や縦ではなく、斜めに縞模様を作っている。

そして、形状はツナギだ。脱いだらその下の下着は、上下とも目が痛いほどの蛍光色の黄色だっ

たりする。目立つからと思つてツナギを脱いでも無駄ということ。かといつて裸は、普通に捕まる案件だ。

「あのオレンジと黄色は蓄光<sup>ちくこう</sup>の特殊染料使つてるから、暗いところですげえ光るんだよ」

「……光る？」

下着も同じで、闇に潜むことなんてできない。そして、一日中ずっと、夜寝る時も明るいままの部屋で過ごしている彼らは、これを知らない。脱走してから夜にびっくりする仕様だ。

「夜に潜めねえのっ。マジお前何？ つてくらい光るから。これも賢者の作ったやつ。本気で、めちゃくちゃ光るんだよ。蓄光力？ やべえの」

「ほお……」

「今度、これを塗料に混ぜて実験してみる。上手くいったら見せるよ」

「分かりました。楽しみです」

普通にワクワクしていらつしやる神殿長。新しい物好きだ。そして楽しい物ならなお良し。

「ところで……彼らが使うだけにしては、椅子やテーブルを置き過ぎでは？」

「見物？ に来た事務官達が、自分達も『目』になるからつて言つて、本当によく来てたからな」この見張り部屋は、完全に休憩室か談話室のような仕様なのだ。ファイルもここまでテーブルや椅子を置く気はなかった。これは必要に迫られてというやつだ。

「中にはここに入れられてる奴らの様子を肴<sup>さかな</sup>にメシを食いに来たり」

「お腹壊しません？」

とても消化に悪そうだと思える。だが、事務官達はそれが良いのだと喜んでいた。

「ここで奴らを眺めながら仕事したり」

「こうはならないようにという戒め<sup>いまい</sup>じゃないですよ？ 多分、いい気味だとかニヤつきながらやるんですよ？」

癒されるとはならないが、心が晴れるらしい。

「是非ともこれは共有したいつて、若いのを連れて来たり」

「それも、気を付けようねというのではないでしょう？ 珍しいものが見られるよと？ 観光みたいな？」

『こちらに入っているのが何々しやがった奴です！』と後輩達に説明する者達は、生き生きしていたという。

「一応、出入りはきちんとチェックしてるし、個々に時間と名も控えるんだけど、ちょい来過ぎるくらい、ちょっと前まで人が来てたんだよ」

「立派な観光地ですね！」

動物園か水族館かというところ。作りこそそれを参考にはしたが、そこまでの客入りは想定していなかった。

「いやあ、マジで動物園的なものになっちゃったわ」

そんなフィルズの言葉に反応したのは、キラだ。

《むっ！ 動物園！ 賢者が言っていたのを聞いたことがあるぞ！ これがそうなのか!?》